

## 庄川流域の積雪調査報告

著者	石坂 雅昭
雑誌名	富山市科学文化センター研究報告
号	15
ページ	101-102
発行年	1992-03-20
URL	<a href="http://repo.tsm.toyama.toyama.jp/?action=repository_uri&amp;item_id=595">http://repo.tsm.toyama.toyama.jp/?action=repository_uri&amp;item_id=595</a>

短 報

庄川流域の積雪調査報告\*

石坂 雅昭  
富山市科学文化センター

はじめに

筆者らは、1982年から1987年にかけて、神通川流域の積雪調査を行い、富山平野の海岸部から岐阜県高山市にかけての積雪の特性を明らかにした(黒田, 石坂, 1988)。今回は、その神通川の西側をほぼ平行に流れる庄川流域の五カ所を選んで積雪調査を行った。先の神通川流域調査の結果と比較対照して、北陸の海岸部から中部地方の内陸にかけての広域な積雪の特性を面的に明らかにすることを目的としている。

測定点は五カ所、断面の雪質観測から、湿雪地域から乾雪地域の区分を明らかにすることを主眼に行った。また、下層のかたしまり雪の密度に注目した。

神通川流域の調査時との冬季の気象の差などを考慮した総合的な考察の結果は、今後別に報告する計画である。ここでは、調査結果を簡単に述べる。

観測結果

観測の地点は図1の5地点である。地点の地名は、表1に掲げたとおりである。図2に各地点の層構造、雪温、積雪水量、平均密度などを示した。

雪温の観測から、積雪内にマイナス温度を観測したのは、地点1の岐阜県蛭ヶ野高原のみであった。その他の地域は、全て雪温が全層にわたり0℃を示した。その中で、地点2、

3は、下層にしまり雪がかなり多く保存されていて、水を大量におびることがなかったことを示しているが、地点4になると、下層にもかなりのざらめ雪があり、完全な湿雪の状態であった。この地点以北の海岸部までの地域は、標高の高い地域を除いて、湿雪地帯と考えられる。すなわち、地点1は明瞭な乾雪地域、地点4、5は明瞭な湿雪地域、地点2、3は、その中間的な状態をあらわしている。

最も大きいしまり雪の密度は、地点3で観測され0.46 g/cm<sup>3</sup>に達していた。この地点の積雪が最も深かったが、積雪水量は地点4の方が大きかった。

文 献

黒田久喜・石坂雅昭, 1988. 神通川流域の積雪特性. 富山市科学文化センター研究報告, 12:97-103

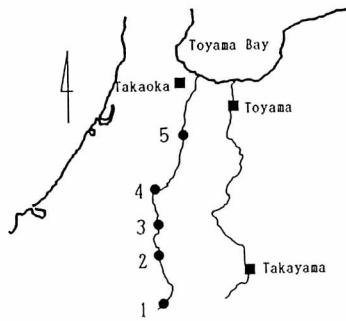


図1. 観測地点

表1. 観測地点名と標高

地点	地名	標高
1	岐阜県上郡高鷲村蛭ヶ野	約900m
2	岐阜県大野郡白川村平瀬	約600m
3	岐阜県大野郡白川村飯島	約400m
4	富山県東砺波郡上平村中田	約400m
5	富山県東砺波郡庄川町小牧	約200m

\* 富山市科学文化センター研究業績第128号

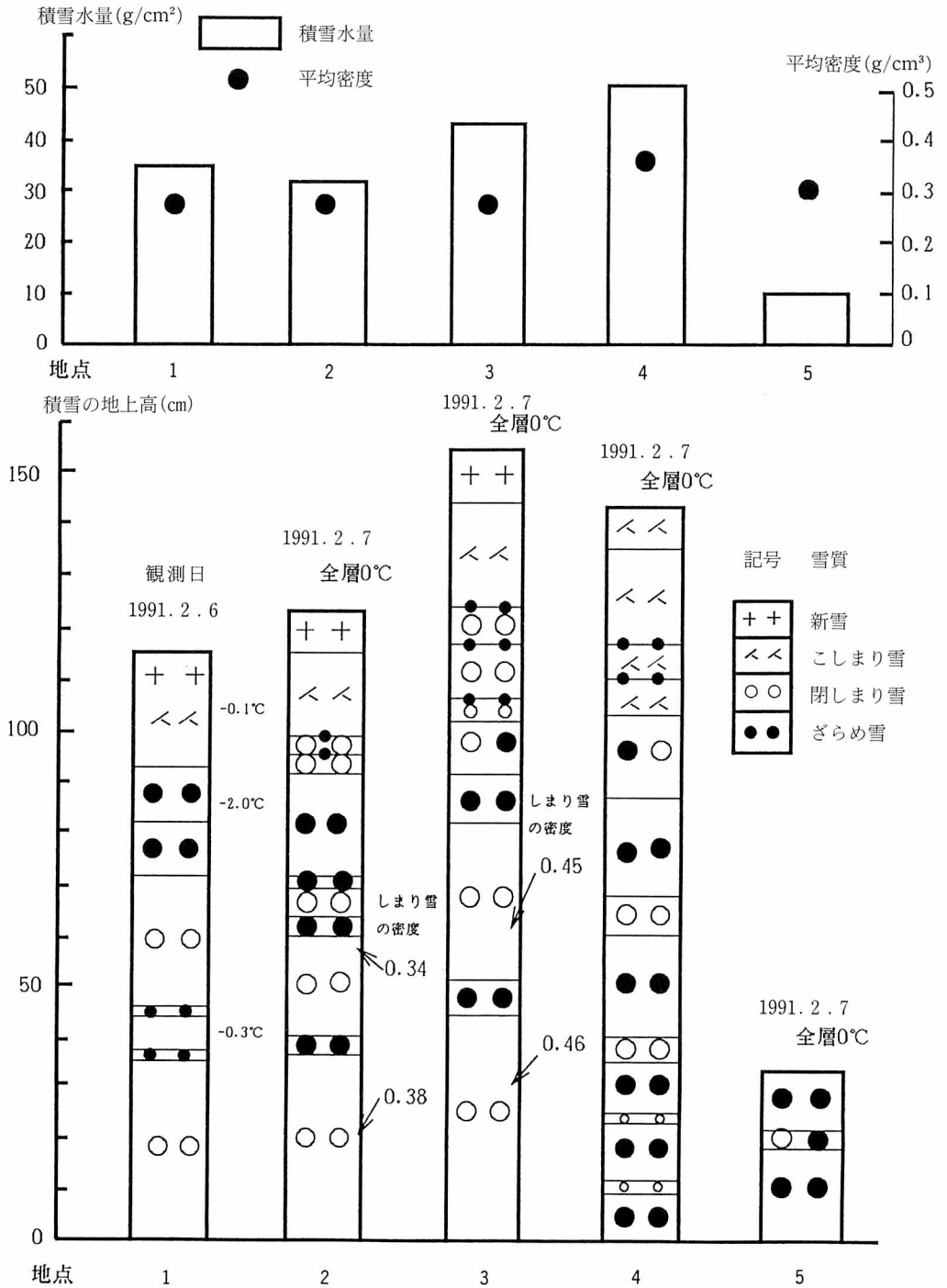


図2 各地点の積雪の層構造と積雪水量及び平均密度